

テ安平街道ノ左右ニ在リ安平ハ臺南城ヲ距ル約チ一里、外國人ノ居留地ハ西北ノ海岸ニ在リテ貿易最モ盛ナリ土人ハ重ニ漁業ヲ以テ生活ヲ爲セリ市街ハ南端ニ在リテ極メテ不潔且ツ富裕ナル者殆ンド無シ又港ノ位置ハ貿易港トシテ最モ適當ナリト雖モ港灣ト相接セズ流洲ノ繫泊所ハ陸地ヲ距ル遠クニ哩ノ外ニ在リテ其不便云フ可ラス此繫泊所ト雖モ貿易風ノ季節ニハ繫泊ハ便ナラズト云フ然レドモ若シ打狗ヲ以テ軍港ト爲スニ至ラバ貿易港ニハ安平ヲ除キテ他ニ優ルモノナカルベシ

基隆ハ島ノ極北ニ在ル港市ニシテ地形山岳重疊シテ港ノ背後ヲ擁ス其中最モ高峻ニシテ巍然海濱ニ屹立スルモノヲ基隆山トス凡ソ海上ヲ往來スル船舶ハ皆此山ヲ以テ指南トセリ基隆ハ其山下ニ在リ市街ノ家屋商壯商店ノ如キモ亦大ナルモノアリト雖モ一般ニ不潔ナリ此地ハ獨リ海防上ノミナラズ地勢ヨリ產物ヨリ將來有望ノ要地ニシテ且ツ氣候モ内地人ノ居住ニ適スベシ

打狗ハ臺灣南部ノ西海岸即チ安平ノ南ニ在ル通商港ニノ常ニ安平港ト消長ヲ成ス淡水ハ臺灣北邊ノ一港市ニシテ淡水河口ヲ溯ル十八町餘ノ右岸ニ在リ此地貿易場ヲ

開キシハ曾テ清領タリシ時、即チ咸豐八年(今チ距ル三十八年前)ナリ  
其他彰化(臺灣ノ西)、嘉義(臺南ノ北)、鳳山(臺南ノ南)、恒春(鳳山ノ南)、新竹(臺北ノ南)、宜蘭(島ノ北東)等ノ都市アリ

#### 第四章

14 氣候ハ如何

14 臺灣島ハ頗ル温熱ナリト雖モ健康ヲ害スルコトナク周年寒ヲ覺ヘズ然レドモ各地ニ就テ之ヲ云ハハ北部山間ノ地ハ温暖ニシテ南部ノ地ハ炎熱ナリ

15 颶風ノ概略ナリ

15 支那海ノ颶風ハ四種アリテ其一ハ「パラワン」ノ北ニ起ル海南島若クハ其南ヲ過ギ其繼續間乃チ最初ヨリ最終マテ各地經過ノ通計時間ハ五六日間ナリ其二ハ最モ多ク線路モ亦遠キニ達スルモノニシテ呂宋近傍ニ起リ其北西ノ支那大陸ニ入り變回シテ上海芝罘間ヨリ朝鮮ヲ衝キ臺灣海峡ヲ通過シテ北東ニ變回シ日本ヲ衝ク此風ハ八九兩月ニ最モ多ク其吹續ハ通常一週間ナルモ或ハ五日ニシテ止ミ或ハ二週間ニ渉ルコトアリ其三ハ其吹源臺灣ノ東ニ在リテ是ヨリ變回シ屢々日本内地ノ南方海濱ヲ拂フ其吹續ハ、三日七日、若クハ十二日間トス而シテ此風ハ第一種ノ風少ナキ年ニ最モ

◎増補●臺灣誌○第四章、氣候、颶風

16 降雨ノ有餘ナ間

多シ其四ハ通常東方ヨリ侶宋若クハ其南西方ヲ横過スルモノニシテ此ハ低緯度ニ起リ風域狭ク吹續ハ僅々二日間許ニ過ギズ  
16 臺灣本島及ビ澎湖列島ハ降雨内地ヨリ多ク霧モ亦之ニ伴ヒ快晴ノ日少ナク濕潤ノ日多キニ居レリ澎湖列島ノ如キハ鹽氣多量ノ雨ヲ降シ植物ヲ枯死セシムルコトアリ臺灣本島モ亦幾分ノ鹽氣ヲ含ミ諸物常ニ菌ヲ生シ殊ニ鐵類ニ錆ヲ生スルコト實ニ甚ダシ

### 第五章

17 物産ノ重ナルモノヲ舉ゲ

17 臺灣ハ物産頗ル多ク就中樟腦、茶、砂糖、石炭ハ最モ多量ノ產出アリ樟腦ノ主産地ハ東半部即チ番地ノ森林中ニシテ殊ニ大科坎地方ハ大樹巨木ニ富ミ其大ナルモノハ直徑十二尺ニ及ブモノアリ苗栗、雲林、恒春、宜蘭等ノ各地方モ亦多ク之ヲ産ス茶樹ノ種類ハ支那茶ノ種類ニシテ日本内地ノ椿葉、柳葉ノ如キモノ、外別種ノモノナシ製茶業ハ臺地附近ヲ以テ重ナル製造地トス砂糖ノ製産地方ハ臺南ヲ中央ニ置キ南ハ恒春ノ浪嬌ニ至リ北ハ嘉義ノ北港ニ至ルマテ沿岸一帯ノ地ヲ重ナル所トセリ

石炭、全島到ル處、探掘シテ出テザル地ナキ有様ナリト雖モ今日ニ至ルマテ多ク基隆附近ニ於テ盛ニ探掘カレタリ  
以上ハ臺灣ノ四大産物ニシテ探炭業ハ現今衰微ニ屬シ樟腦及ビ砂糖ノ二業ハ未ダ幼稚ノ域ヲ脱スル能ハス獨リ製茶業ニ至リテハ其進歩頗ル著シク殆ンド全島ノ各事業ヲ壓倒スルノ狀況アリト云フ

農産物ハ至ル處ニ多ク就中米ハ其最モ重ナルモノニシテ一年間二回ノ収穫アリ(第一回ノ播種ハ一月ニシテ五月ニ之ヲ蒔入レ第二回ノ播種ハ七月ニシテ十一月ニ之ヲ蒔入ル、ナリ)甘蔗、小麥、甘薯、煙草、藍、豆ノ如キモ亦重ナルモノナリ此數種ノ中甘薯ハ其耕作盛ニシテ本島農産物中米ニ亞キテ重ナルモノトス  
以上ノ外、生姜、大根、葱、菜、蜀黍、落花生、茄子、菠薐、芋、蕪、蒜、麻、檉、櫻、椰子、密柑、林檎、梨鳳梨、瓜類等アリ

竹ハ臺灣ノ名産ニシテ到ル處竹林アリ質良ニ肉厚ク丸竹ヲ四分セシモノニテ二十貫内外ノ重量アルモノヲ擲ヒ得ベシ然レドモ内地ノ如ク淡竹、孟宗ノ類ナク恰モ女竹

◎增補 臺灣誌 第五章 物産

ノ大ナルモノ、如ク大ナルニ至テハ直径五六寸ノモノアリ其他檳榔子最モ多シ  
飛禽ニハ鴨、雞等アリ獸畜ニハ水牛、鹿、熊、牛、猿等アリ魚介ニハ鯛、鯖、鮪、  
鱈、鱈、鯉、鰻、鱧等アリ就中鯉及ヒ鰻ハ大溪河ニ多クシテ鯉ハ二尺餘ノモノ  
アリ鰻ハ三貫目餘ノモノアリ其他鮎等ノ魚類最モ多ク産出セリ

### 第六章

18臺灣ノ地タル古來主宰其人ナシ足利氏ノ末ヨリ徳川氏ノ始メニ至ル間、所謂倭寇  
ノ盛ナルヤ臺灣ノ一島、其占領スル所トナリシコトハ史ニ徴シテ明カニシテ清國  
人ガ臺灣アリシヲ知レルハ實ニ元末明初ノ交ニ在リトス而シテ今ヲ距ル凡ソ二百八  
十一年前、明ノ萬曆中、南海ノ盜首海徵ノ顔振泉ナル者、我が九州邊海ノ民ヲ率  
船メテ此島ニ據リ自ヲ稱シテ日本甲螺(頭目)ト云フ尋テ其黨、鄭芝龍ハ顔ノ死後推  
サレテ酋長トナリ其明朝ニ降リシヨリ遂ニ我邊民ノ占ムル所トナレリ元和七年(明  
ノ天啓元年)蘭人此地ヲ收メ安平、赤嵌ノ二城ヲ置ク寛文元年(明ノ永曆十五年、  
清ノ順治八年)三月芝龍ノ子成功(國姓爺)此地ニ入り蘭人ヲ掃蕩シ改メテ安平鎮ト

18沿革ヲ  
述ベヨ

01人種ヲ  
問フ

シ總稱シテ東寧ト曰ヒ敢テ清朝ノ約束ニ從ハズ明代衣冠ノ俗ヲ更メザルコト年アリ  
夫ノ援兵ヲ徳川幕府ニ請ヒシハ即チ此際ニ在リ成功ノ歿後、其子、經(錦舍)孫、克  
爽相繼テ立チ康熙帝ノ二十二年ニ至リ始メテ清國ノ版圖ニ歸シ再ヒ臺灣ト稱ス西曆  
千八百五十八年(咸豐八年)英佛米三國ノ同盟ヲ以テ始メテ開港シ千八百八十三年  
(光緒九年)ハ南事件ニ當リ劉銘傳全島ノ兵ヲ統ア時ニ佛軍基隆ヲ占領シ進ンテ澎湖  
島ヲ零ク後、和ヲ講シテ之ヲ復スルヲ得タリ爾後、小田縣及ヒ琉球ノ民生蕃ノ地ニ  
漚着シ土人ノ爲メニ殺サル是ニ於テ明治七年今ノ西郷海軍大將問罪ノ師三千六百及  
ヒ軍艦四隻ヲ率テ蕃民ヲ征服ス清國之ヲ聞キ我軍ノ擅伐ヲ詰ル乃チ大久保内務卿  
ヲ以テ辨理大臣トシ清國ニ遣ハシ清領ニアラザルコトヲ論ズ清國總理衙門李鴻章辭  
ヲ左右ニ托シ依違決セズ事殆ント危シ英國公使清國政府ニ勸メ竟ニ償金四十一万兩  
及ヒ撫恤金十萬兩ヲ出シテ我ニ謝セシム和議乃チ成リ征臺ノ諸軍凱旋ス明治二十八  
年四月日清講和條約ニ因テ我版圖ニ歸セリ

02增補臺灣誌〇第六章、華人、沿種

其一生蕃ハ數千年同島ニ居住スル無智頑陋ノ種族(此種族ヲ又四種ニ分チ第一「バイ  
 ワン」種族、第二「ボナン」種族、第三「アミヤス」種族、第四「ベボワン」種族トス)ニ  
 シテ其二熟蕃ハ生蕃ガ渡來清人ノ爲メニ開發セラレタルモノニシテ半開ノ種族ナリ  
 其三土人ハ即チ數百年間支那ヨリ渡來セル者ノ子孫ニシテ其四開港地ノ清人はナリ  
 以上ノ中第三ノ土人ハ最モ温順ニシテ質朴ナルノミナラズ教育モ畧ホ我内地邊陲ノ  
 人民ト彷彿タルモノナリ因ニ記ス第三ノ土人ハ往昔清國福建省ノ泉州、漳州ヨリ移  
 住シタル者ナルベシ今尙ホ泉州村、漳州村ト稱シ他ノ種族ト婚嫁相通セズシテ互ニ  
 反目スルノ風アリ

生蕃ノ骨格ハ男女共ニ概シテ日本人ヨリ大ナリト雖モ壽命ニ至リテハ却テ短キモノ  
 、如ク彼等ノ中ニハ老年者ナク高年ト稱スル者ハ三十二三歳ニ過ギズト云フ  
 20 馬來社ト稱スル生蕃地ハ馬來社、有干敏社、馬來阿九社、瓦丹有洛社、瓦丹平藥  
 社、瓦丹帶慶社、林風眼社、後坑社ノ八部落ヲ總稱ニシテ此八社ハ凡ソ四里許ヲ距  
 テ、散在シ其一社ノ戸數多キハ三十、少ナキハ十、總數二百戸許、人口八百許アリ

20 生蕃ノ  
 概略ヲ述  
 ベヨ

21 人口ハ  
 幾何アリ  
 ヤ

22 風俗ヲ  
 問フ

ト云フ

大寮坑ノ生蕃ハ其數四十七社アリ各社ニ社頭アリ四社若クハ五社ニ頭目アリ頭目中  
 更ニ總目ナル者アリテ諸般ノ秩序ヲ設クルモノ、如シ

21 臺灣ノ我が版圖ニ歸セシヨリ年尙ホ淺ク殊ニ土匪掃討等ノ事アリシヲ以テ其人口  
 ノ詳カナルコト得テ知ル可ラズト雖會テ稱スル處ニ據レバ支那人及ビ熟蕃人ヲ合ス  
 レバ大約三百萬人ニ下ラズ其他屬島中澎湖島ハ大約八千人、火燒嶼ハ大約五百人、  
 紅頭嶼ハ大約千人内外ナルベシ

22 臺灣ノ土人及ヒ在住ノ支那人等ハ概子頑愚ノ者多ク常ニ煙草ト鴉片ヲ喫スルヲ好  
 ミ又女子ハ平素檳榔子ヲ咀ムノ習慣アリ

生蕃ニ於ケル社會的風俗ハ尙ホ男尊女卑ニシテ女子ハ總テ男子ノ命令ニ從ヘリ又酋  
 長ノ勢力ハ熾ニシテ一社内ノ賞罰皆其意ニ依ル又生活ハ總テ共同的ニシテ眞ノ共產  
 主義ヲ實行スルモノ、如ク甲家ニ米ナケレバ乙家ニ貸ヒ乙家ニ鹽ナケレバ甲家ニ仰  
 ギ丙家獸肉ヲ贈リテ丁家魚肉ヲ還スト云フ有様ニシテ有無相通シ更ニ保守スルコト

◎増補●臺灣誌○第五章、人口、風俗

ナシ故ニ田圃ノ如キモ甲社ト乙社トノ境界アルノミニテ一社内各家ノ所有ヲ區別スルコトナク一社内ノ田圃ヨリ收穫スルモノハ各家平分セリ

生番ノ男子ハ臺灣土人ヨリハ伶俐ノ容貌ヲナシ頭髮ハ短キアリ長キアリ又結ビタルアリ其他種々ノ者アレドモ辮髮ヲ有スル者ハ一人モナシ而シテ皆帽子ヲ戴ク帽ハ藤製ニシテ頗ル巧ニ製造セリ殊ニ首長ハ首庇ヲ附シ恰モ鳥打帽子ノ如シ彼等ハ一人モ髻ヲ有スル者ナク眉間ト腮トニ青色ノ入墨ヲ爲シ兩耳ニ小指大ノ孔ヲ穿チテ圓竹ノ削片ヲ押込ミ衣服ハ「シヤツ」ノ如キ袖ナキモノヲ着シ腹掛ヲ爲シ黒キ腹巻ノ如キモノヲ結ビ又襦袢ノ如キモノニハ紐ノ美麗ナルモノヲ縫附ケ頸ニハ貝類角類ノ飾ヲ爲シ又寒キ時ニハ風呂敷ノ如キモノヲ腹部ニ掩ヒ手足ハ一物ノ被フモノナク足ハ常ニ徒跣ナリ

牛蕃ニ於ケル女子ノ服裝ハ男子ト大差ナシ唯足ニ跣袴ノ如キモノヲ附シ且ツ腰巻ヲ爲セリ裝飾ハ耳ニ孔ヲ穿チ長サ五寸許ノ竹ヲ挿シ頭部ニハ四尺許ノ黒色ナル一幅木綿ノ端ニ赤總三四箇ヲ附シ之ヲ以テ頭ヲ巻キ而シテ其巻キタル處ニ煙管ヲ挿メリ

又生際ヨリ眉間ニ幅五分許ノ入墨ヲ爲シ耳ヨリ口ニ懸ケテ一寸五分許ノ入墨ヲ爲セリ又彼等ハ男女共ニ上ノ前齒二本ヲ殘シ其兩側ノ齒一枚宛ヲ抜クヲ常トス  
大料坎ニ於ケル生蕃ノ生活、婚姻、埋葬ノ狀況ハ左ノ如クナリシ

生活、食物ハ米、粟、甘藷、薑、芋ヲ主食品トシテ凡テ鹽漬ナリ米釀酒アリテ彼等常ニ之ヲ飲ム衣料ハ綿麻多ク又寒暑四時衣ヲ更ムルコト無シ家屋ハ三戸乃至十戸ツ、接近シ凡テ溪水ニ添フ

婚姻、男十八歳、女十五歳以上ノ者多シ中ニ許嫁アリ年老テ娶ル能ハサルハ貧者ナリ其狀況ハ男先ツ女ノ家ニ行キ一家集テ飲食シ後、婦ノ親族ヲ伴ヒテ一同男子ノ家ニ來ル爰ニ双親一族相集リテ盛食ス其習俗一夫一婦ニシテ絶テ妾ヲ有セズ然レトモ婦死シテ後、妻ヲ迎ヘ夫死シテ再嫁スルコトアルモ事ニ依テ離婚スルコトナシ埋葬、死セバ最後ニ伏シタル屋内ニ身丈ノ穴ヲ穿チテ之ヲ埋メ一家他ニ移リテ其家ニ住スルコトナシ

臺灣誌終

附錄

第一章

1 各府縣 ノ面積及 一万里ノ 人口		1 東京	神奈川	埼玉	千葉	茨城	栃木	群馬	長野	山梨	静岡	愛知
面積	五二、一七	二二九、一七	二六五、八四	三二六、四五	三八五、一六	四一一、七七	四〇七、二五	八五三、七六	二八九、八五	五〇三、八二	二二二、七八	
一万里 人口	二九、八九三	四、一三六	三、九六七	三、五九一	二、五九四	一、六六二	三、七六四	二、三〇二	二、五三六	二、一〇〇	四、六一七	

〇第三編 地理各論△附錄

青森	岩手	秋田	山形	宮城	福島	新潟	富山	石川	福井	滋賀	岐阜	三重
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	面積
六〇七、〇三	八九九、一九	七五四、〇〇	六〇〇、一五	五四〇、七九	八四六、〇七	八二四、五九	二六六、四一	二七〇、七二	二七二、四〇	二五八、四四	六七一、四五	三六八、五五
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	一 方里 人口
、八七四	、七三〇	、九〇六	二、三三六	二、三六二	一、〇八〇	二、〇二〇	二、七七二	二、七五二	二、一九一	二、五八三	二、三五四	二、四六八

愛媛	香川	徳島	鳥取	島根	山口	廣島	岡山	兵庫	和歌山	奈良	大坂	京都
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	面積
三四一、一七	一一三、五〇	二七一、二八	三二四、一六	四三五、八二	三八九、九九	五二〇、七八	四二〇、九八	五五六、六八	三二〇、六二	二〇一、四二	一一五、七二	二九六、五五
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	一 方里 人口
二、六五七	五、八一九	二、四九二	、七五九	、五八八	二、三四四	二、四七五	二、五二三	二、七三四	二、〇〇八	二、四六五	三、〇七二	二、九五二

府縣 及府縣 元標二至	府縣 所在地	面積	人口	一 方 里
高知	高知	四五四、七二	全	一、二五三
長崎	長崎	二三五、一五	全	三、二〇〇
佐賀	佐賀	一六〇、〇八	全	三、四五七
福岡	福岡	三二七、八一	全	三、八〇五
熊本	熊本	四六五、四七	全	二、二三九
大分	大分	四〇二、七三	全	二、九四一
宮崎	宮崎	四八七、三四	全	八三七
鹿兒島	鹿兒島	六〇二、三一	全	二、六三六
沖繩	沖繩	一五六、九一	全	二、三八五
北海道	北海道	全六、〇九五、三六	全	〇五七
2 東京府	武藏 東京		神奈川縣	武藏 橫濱
埼玉縣	武藏 浦和		千葉縣	下總 千葉
茨城縣	常陸 水戸		朽木縣	下野 宇都宮

里程

群馬縣	上野 前橋	長野縣	信濃 長野
山梨縣	甲斐 甲府	靜岡縣	駿河 靜岡
愛知縣	尾張 名古屋	三重縣	伊勢 津
岐阜縣	美濃 岐阜	滋賀縣	近江 大津
福井縣	越前 福井	石川縣	加賀 金澤
富山縣	越中 富山	新潟縣	越後 新潟
福島縣	岩代 福島	宮城縣	陸前 仙臺
山形縣	羽前 山形	秋田縣	羽後 秋田
岩手縣	陸中 盛岡	青森縣	陸奥 青森
京都府	山城 京都	大坂府	攝津 大坂
奈良縣	大和 奈良	和歌山縣	紀伊 和歌山
兵庫縣	攝津 神戶	岡山縣	備前 岡山
廣島縣	安藝 廣島	山口縣	周防 山口



島根縣	出雲松江	鳥取縣	因幡鳥取
福島縣	岩代福島	香川縣	讚岐高松
愛媛縣	伊豫松山	高知縣	土佐高知
長崎縣	肥前長崎	佐賀縣	肥前佐賀
福岡縣	筑前福岡	熊本縣	肥後熊本
大分縣	豐後大分	宮崎縣	日向宮崎
鹿兒島縣	薩摩鹿兒島	沖繩縣	琉球那覇
北海道	石狩札幌		

東京日本橋ヨリ廳府縣元標ニ至ル里程

京都府	京都三條大橋	東海道通	百三十里
大坂府	大坂高麗橋	京都ヲ經	百四十三里
神奈川縣	橫濱本町	神奈川ヲ經	八里
兵庫縣	神戸市場町	京都ヲ經	百五十三里

長崎縣	長崎外浦町	京都及小倉ヲ經	三百四十五里
新潟縣	新潟本町	三國通リ	八拾九里
埼玉縣	浦和中町	若松ヲ經	百八里
千葉縣	千葉本町	高田ヲ經	百八里
茨城縣	水戸下市七軒町	中山道通	六里
群馬縣	前橋連雀町	市川ヲ經	十里
朽木縣	宇都宮	土浦通	二十九里
三重縣	津揚示場	熊谷及伊勢崎ヲ經	二十八里
愛知縣	名古屋鉄砲町	古河ヲ經	二十八里
静岡縣	静岡吳服町	四日市ヲ經	百十二里
山梨縣	甲府錦町	熱田ヲ經	九十四里
滋賀縣	大津上京町	東海道通	四十六里
岐阜縣	岐阜白木町	甲洲街道通	三十五里
		東海道通	百二十七里
		名古屋ヲ經	百三里

長野縣	長野大門町	中山道追分ヲ經	五十八里
宮城縣	仙臺大町	陸奥街道福島ヲ經	九十二里
福島縣	福島上町	陸羽街道通	七十里
岩手縣	盛岡紺屋町	仙臺通	百四十里
青森縣	青森米町	仙臺通 米澤通	百九十二里
山形縣	山形七日町	米澤通	九十四里
秋田縣	秋田大町	全	百五十里
福井縣	福井照手上町	名古屋及番場ヲ經テ	百四十里
石川縣	金澤尾張町	高田ヲ經 名古屋及福井ヲ經	百二十七里
富山縣	富山西町	中山道通り信濃 追分ヨリ長野及魚津ヲ經	百十里
鳥取縣	鳥取	京都及智頭ヲ經	百九十九里
島根縣	松江堅町	京及津山ヲ經	二百二十三里
岡山縣	岡山橋本町	京都及姫路ヲ經	百八十九里

廣島縣	廣島細工町	全	二百三十三里
山口縣	山口大市町	京都及廣島ヲ經	二百六十九里
和歌山縣	和歌山京橋	大坂ヲ經	百六十一里
德島縣	德島西横町	明石ヲ經テ淡路通り	百八十二里
愛媛縣	松山札ノ辻	下津井及丸龜ヲ經テ	二百四十八里
高知縣	本町揭示場	全	二百三十九里
福岡縣	福岡橋口町	小倉及山家ヲ經テ	三百十一里
佐賀縣	佐賀白山町	東海道通り及中國筋 馬關ヨリ小倉ヲ經テ	三百十七里
大分縣	大分頌田橋	京都及小倉ヲ經	三百二十里
熊本縣	熊本新町	小倉及久留米ヲ經テ	三百三十二里
宮崎縣	宮崎上野町	東海道通り及中國筋馬關 ヨリ小倉大分ヲ經テ	三百七十一里
鹿兒島縣	鹿兒島山下町	小倉及熊本ヲ經	三百八十八里
沖繩縣	那覇	鹿兒島及大島 那覇ヲ經テ	五百七十四里

3 各市現  
住人口

北海道廳	札幌	二百七十六里
3 東京市	一、二四一、九九一	
京都市	二八八、八六七	
大阪市	四七〇、三〇九	
堺市	四五、五二〇	
新潟市	四六、四七五	
水戸市	二五、九一五	
津市	二六、一六八	
名古屋市	一六五、三四三	
静岡市	三八、三三七	
甲府市	三一、六七一	
岐阜市	二八、五九〇	
仙臺市	六〇、九八四	
仙臺通リ待森函館 管小牧ヲ經テ		
横濱市	一二八、一九五	
神戸市	一三六、二二三	
姫路市	二五、七六八	
長崎市	五七、六一二	
高岡市	二九、六一四	
鳥取市	二八、一〇一	
松江市	三五、三三四	
岡山市	四五、一七九	
廣島市	八六、〇二四	
赤間關市	三〇、四三三	
和歌山市	五五、五一一	
徳島市	六〇、一二四	

第二章

盛岡市	三二、九二五	高松市	三三、七二四
弘前市	三〇、三八七	松山市	三三、一九二
山形市	二八、六七五	高知市	三一、一五七
米澤市	二八、九一四	福岡市	五一、八六四
秋田市	二八、七〇三	久留米市	二九、二三四
福井市	三九、九四八	佐賀市	二六、四一一
金澤市	九三、五一七	熊本市	四九、六二三
富山市	五八、二五二	鹿兒島市	五七、〇〇

4 本邦中  
ノ最大國  
ト最小國  
5 海洋ニ  
接セザル  
國

4 信濃ノ境界十國ニ接シ東西三十三里南北四十里本邦第一ノ大國トス志摩ハ東西僅  
ニ三里南北六里ニ過キスシ最小國タリ

5 山城、大和、河内、(以上)伊賀、甲斐(東海)近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、岩代(以上東)  
丹波(山陰)美作(山陽)ノ十四國ハ海洋ニ接セズ

訂正 日本小地誌

明治二十五年一月十六日出版  
明治二十九年十月廿六日訂正增補第一版

著者 京都市下京區門脇町三十二番地  
香川 一 秀

訂正增補者 松本 仁 吉

發行者 大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷  
石田 忠 兵 衛

專賣者 大阪市東區安土町四丁目十一番屋敷  
積善館 本店

專賣者 福岡市博多中島町七十六番屋敷  
積善館 支店

專賣者 廣島市本町通鹽屋町二十五番屋敷  
積善館 支店

印刷者 大阪市北區樽屋町十番屋敷  
山 口 恒 七





38  
5